



よなか ふしぎ わ  
世の中には不思議で分かりづら  
いことがたくさんあります。自然、  
かがく れきし くわ せんせい  
科学、歴史など、詳しい先生に解き  
あ  
明かしてもらいましょう。

し ころ き しん  
**知りたい好奇心**



©原ゆたか / ポプラ社

# 自由に使える水道の水 先人の努力のたまもの

日本に水道が普及し始めてすでに100年以上が過ぎました。今は、蛇口をひねればいつでも、たつぷり水が使えます。それがあまりに当たり前になってきているのですが、水道があるというところ、いつでもたつぷり水が使えるというところは、同じではありません。私たちが住んでいる

## 農村と都市部対立

甲府市で水道事業が始まった大正2（1913）年ころ、当時の市街地は今よりずっと小さく、甲府駅の南側の一角、西は相川から東は今の城東、青沼あたりだったようです。この市街地の一番近くを流れる大きな川は荒川です。甲府城の城下町だった江戸時代から、この地域には荒川の水を引いた「甲府用水」が作られ、生活に使われていました。

に長い間、農村と都市部との間には荒川の水をめぐった対立がありました。

## 十分な水量確保

その解決策として、昭和初期に荒川の上流に貯水池が作られました。これが今の千代田湖です。甲府市の水道水は、その後、荒川ダムができたことや甲府盆地の南にある地下水が使えるようになったことで十分な水量を確保できるようになりました。山梨県は緑と水が豊かです。しかしそのことと、実際に暮らして使える水が簡単に手に入るのか、ということとは別の話であることが、甲府市の例からも分かります。甲府市に限らず、今、私たちが何不自由なく水道の水を使えるようになった歴史を見ると、あつて当たり前の水道を作り上げてくれた先人たちがいたことに気づかされます。多くの人たちの苦勞に思いをはせると、水道水の味がまた違つて感じられるかもしれません。

水道が引かれた当初も、荒川の水が大切な水道水源であることに変わりはありませんでした。しかし、当時、荒川周辺には農地が広がり、荒川の水は田んぼに入れる大事な水でもありました。限られた量の水です。甲府の街中にたたくさんの水を送れば、田んぼに使う水の量は減ってしまいます。これは農家にとつては大変なことで、そのため

この原稿を書くため、甲府市水道局の方々から多くの情報をいただきました。感謝いたします。

今は魚釣り客でにぎわう千代田湖ですが、その成り立ちには、とても深刻な事情がありました

（山梨大大学院医学工学総合研究部国際流域環境研究センター）生命環境学部環境科学科兼任教授 風間ふたば